

## [巻頭言]

## 特集「カメ類の起源と進化を考える」

平山 廉\*

カメ類は化石記録が豊富であるだけでなく、現生種も300種を数えており、形態学や分子生物学など様々な手法による系統学的研究の対象となっている。カメ類が初めて出現した中生代三畳紀の化石資料が21世紀になって充実してきており、その起源がどこまで遡るのか分析と議論が続いている。化石記録に恵まれているにもかかわらず、カメ類と他の有羊膜類との系統関係は未だに研究者の合意を得ているとは言い難い。というのもカメ類の甲羅を主体としたボディ・プランがあまりにも特異であるうえに、真に移行的な化石が知られていないからである。

本号には、2016年6月11日（土）に行われた化石研究会第34回総会・学術大会におけるシンポジウム「カメ類の起源と進化を考える」において、講演された、日本国内のカメ類研究をリードする5名の研究者による論文が収められている。倉谷 滋氏は、独自の発生学的アプローチからカメ類の甲羅形成の本質を論じているが、これはカメ類に類似した化石タクサの系統関係を評価する上でも重要な情報を含んでいる。平山

は、近年の新知見により三畳紀の根幹的（あるいは基盤的）なカメ類の系統学的な意義を論じ、更に古生代の *Eunotosaurus* がカメ類の祖先形であるか否かを分析している。吉田将崇氏は、白亜紀から古第三紀に繁栄したボトレミス科という奇妙な頭骨を持つ絶滅群の研究史をまとめており、今後の研究成果の公表が期待される。高橋亮雄氏は、琉球列島の更新統から多様な陸生カメ類が発見されているが、その多くはすでに絶滅していることを報告している。中島保寿氏は、カメ類の四肢骨の内部構造がその生態や生息環境によって著しく異なること、またそれは哺乳類など他のタクサにも見られることを報告している。

本号に収められた以上の論文を通じて、カメ類の起源と進化研究の現状と今後の課題をご理解していただければ幸甚である。さらに多くの研究者がカメという題材に興味を持ってくださることを切に願う次第である。最後に、シンポジウム講演をしていただいたうえに原稿を本号に寄せていただいた筆者の皆さんにこの場を借りてあらためて御礼を申し上げる。

\*早稲田大学国際教養学部 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

School of International Liberal Studies, Waseda University

4 F, Building 11, 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo 169-8050 Japan

E-mail: renhirayama@gmail.com